

■H30.1.5 市長定例記者会見内容

日時 平成30年1月5日（金）午前11時～11時45分（終了後、「ミニ立て山鉾」の贈呈式開催）

場所 庁議室

出席 市長、副市長、市政推進調整監兼危機管理監、企画振興部長、商工観光部長、政策推進課長、危機管理課長、商工港湾課長、観光振興課長、スポーツ振興課長、社会教育文化課長、市長公室長

酒田記者クラブ 7社（毎日新聞、山形新聞、荘内日報、朝日新聞、河北新報、読売新聞、SAY）

■内容

1. 記者発表事項

昨年は酒田の取り組みを報道で取り上げていただき感謝。今年もニュース映えする活動をしていきたいと思うので引き続きよろしく願います。

①三重県南伊勢町との河村瑞賢交流事業について

市長／1月24日（水曜日）に三重県南伊勢町と協調する事業として、東京都日本橋にある三重県の首都圏営業拠点三重テラスにて交流事業を開催することになった。

これは、昨年6月に、南伊勢町の有志がヨットで西廻り航路ゆかりの港である本市を訪ね、南伊勢町長からの親書をいただいたことがきっかけとなり行うもの。

今回は、三重県の首都圏営業拠点である三重テラスにて、酒田の食や日本遺産のPR事業を行う。酒田の旬の食材である、米、日本酒、寒鱈などを会場併設のレストランにて南伊勢町の食材と合わせて調理し、参加者に対して振る舞い、また、北前船寄港地として認定を受けた日本遺産のサブストーリーとして、河村瑞賢に焦点を当てたパンフレットを配布して酒田の魅力を発信する。当日は、昨年ヨットで来酒した、南伊勢町観光協会特命観光大使の寺田順さんとの対談も行う予定。

ご存知のとおり、河村瑞賢は江戸時代前期に活躍した幕府の御用商人であり、江戸の人口増加により米の需要が増した当時、出羽国の年貢米を江戸に届けるための西廻り航路を整備し、酒田の発展に大きく寄与した人物。

瑞賢公生誕400年となる平成30年、河村瑞賢を共通の財産として南伊勢町と協調した事業を行い、両市の魅力向上を図りたいと考えている。

ぜひこの取り組みも取材もお願いしたい。

2. フリー質問

①年始に当たっての所感

記者／念頭の所感を伺いたい → 市長／人財と風土が支える産業・交流都市づくりという公約をつくって2年間やってきた。交流都市づくりに関しては2年間いろいろや

ってきたし、今年も2020年に開催されるオリンピック・パラリンピックのキャンプ地誘致に向けた活動や、関係しておしんレースそのものもてこ入れするなど、いろいろな交流イベントを予定している。引き続き交流都市づくりは頑張っていきたい。産業都市に関しては、支援体制の充実に努めていきたい。産業振興センターは将来的には産業会館に拠点を設けて活動していきたく思っている。

そのほかに文化や芸術を使った人づくりを今年新たな旗印として掲げたい。現在、教育委員会で文化芸術振興基本計画や条例策定の準備を進めている。小幡や白ばらの取り組みも文化芸術の振興の一環。

魅力あるまちづくりのため、今年は河村瑞賢の生誕400年にあやかり新しい酒田に生まれ変わる年にしたい。厳しい環境が取り巻く中で荒波の中に漕ぎ出すようではあるが、荒波を越える動きを強めていきたい。

記者／今年の意気込みを漢字一文字でたとえると → 市長／「和」。和は訓読みで読むと「なごやか」。和やかな関係作りや和やかな議論に収束できるような役所を作っていきたい。また、天の時、地の利、人の和という言葉があるように人の和も大事。地域の産業界の和がないと地域課題の解決は達成できないので、和を構成していろいろな課題に取り組んでいきたい。

②プレステージ・インターナショナルアランマーレへの今後の支援策について

記者／今後の支援策を考えているのか。 → 市長／酒田に本拠地を置く企業が持っているチームなので、練習や大会で施設を使用する際には全額使用料を免除している。昨年、酒田市とアランマーレで協定を締結し、市として広報活動での後押しや市民の機運醸成などを協定の中で約束している。今後も市、体育協会などとも連携しながら支援体制を継続していきたい。

来シーズンからはVリーグの2部に認められたと聞いている。2部に参入するにはホームとなる施設の観客席が1,500席、さらに1部では3,000席が必要。国体記念体育館で仮設の観客席を入れれば1,500席は確保できる。ファンクラブに私も入ったし、ファンクラブを盛り上げないといけないという気持ちもあるので、市の広報紙などを使ってファン作りをしないといけないと思っている。ただし、酒田だけでなく、庄内、県全体で盛り上げる必要があるのではないかと考えており、モンテディオ山形もパスラボワイヴァンズもアランマーレも2部リーグのスポーツチーム。県を挙げての応援体制も働きかけをしていきたい。アランマーレ自体の組織力も大きくないので、行政としても支援していきたい。アランマーレから具体的な要望はないが、地元チームだともっと浸透させなければならない。

記者／1,500席の確保は当面は仮設なのか → 市長／国体記念体育館は1,040席。残りはパイプ椅子などで確保できる。1部に上がったときには3,000席確保しなければならないが市単独での整備は難しいので、そこに向けて今から県にも働きかけをして

いきたい。

③平成 29 年 12 月 27 日（水）に行われた旧割烹「小幡」の説明会において示された調査結果、利活用方法の実現性について

記者／今後どのように進めるのか → 市長／小幡については、調査結果に則って整備していきたいと考えており、なるべく早めに、できれば来年度実施設計まで取り組めればよいと考えている。

交流人口を増やすことが地域の存在感を維持すると考えており、酒田ならではの街の魅力を磨いていく必要がある。山居倉庫や小幡、白ばら、山王くらぶ、相馬楼といった酒田にある資産をより魅力あるものに再生させる歴史市街地構想を練っている。白ばらはソフト体制が勝負。白崎映美さんなどが魅力あるショーを展開できるようになればいいと思う。民間と行政のすみわけをして、観光資源として必要だと確立されれば、行政としても支援していきたい。相馬楼の舞妓と同じように民間に運営いただくようなことで考えていきたい。

記者／小幡については、できれば来年度実施設計との発言だったが、市長がやるといえ
ばできるのでは → 市長／個人的にはやりたいと思っているが、来年度の予算を組むに当たって財源的なところがまだ見れていないので、和を大事にして全体を見て判断をしたい。ただ、歴史市街地構想の中で優先すべきは小幡と考えている。

記者／費用の財源はどのように考えているのか。 → 市長／中心市街地活性化基本計画に載っているの
で、本庁舎の整備の時と同じようにできるだけ多くの財源を模索しつつ独自財源もある程度必要だと思っている。安全性の面を考えても急ぎたい。整備した後の運営組織、飲食提供機能やイベント機能に運営主体が常にいることも大事だと考えている。

記者／小幡を文化財とすることは考えているのか → 市長／今のところ、活用中心で考えている。文化財にこだわるとスピード感が落ちる。市民の感覚としても文化財として残してほしいという感じはしない。

記者／光丘文庫についてはどうしていくのか → 市長／まだ調査に入っていないので結論はまだ。正直少し遅れている。文化財に指定するとなると県や国の動きを待たざるを得ないので、小幡のような活用をするのか、長期スパンで文化財などを考えていくのか、もう少し議論が必要。小幡と違って安全面で緊急ではない。図書館機能も残せばいいが、図書の収蔵庫をつくることができるのかなど考えなければならない。建物そのものは魅力あるので残したい。

④八幡病院について

記者／八幡病院の診療体制の変更は無事に終わったのか。 → 市長／無事に終わりました。